九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Validation of masticatory function and related factors in maxillectomy patients based on the concept of “oral hypofunction”: A retrospective cross-sectional study

藤川, 夏恵

https://hdl.handle.net/2324/4475043

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

KYUSHU UNIVERSITY

（様式３）

氏　　名　：藤　川　夏　恵

論 文 名　：Validation of masticatory function and related factors in maxillectomy patients based on the concept of “oral hypofunction”: A retrospective cross-sectional study
（「口腔機能低下」の概念に基づく上顎切除患者の咀嚼機能および関連因子の検証：後ろ向き横断研究）

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

目的：上顎切除患者の口腔機能はさまざまな方法で評価されてきたが、その評価は、基準が存在せず依然として困難である。 本研究の目的は、「口腔機能低下症」の概念に従って、上顎切除患者の咀嚼機能、最大咬合力（MOF）、および最大舌圧（MTP）を客観的に評価し、咀嚼機能と関連する因子を検証することとした。
方法：顎義歯を使用している上顎切除患者 50 人（男性 23 人、女性 27 人：年齢の中央値＝72 歳、四分位範囲（IQR）＝63.75～77 歳）を対象とし、「口腔機能低下症」の診断基準に従い、咀嚼機能、MOF、および MTP の検査値と患者因子（年齢、咬合支持数、および上顎欠損の分布）を診療情報記録より抽出した。「口腔機能低下症」の基準値を超えた患者数と、咀嚼機能、MOF、および MTP に対する咬合支持数および上顎欠損の分布の影響を解析した。また、咀嚼機能と他の因子との関連を評価するために、重回帰分析を行なった。
結果：咀嚼機能の中央値（114 mg / dL、IQR：73-167.5）は「口腔機能低下症」の基準値を超えたが、MOF（229.2 N、IQR：110.2-419.6）および MTP（25.9 kPa、IQR：21.4-29.0）は超えなかった。各口腔機能の基準値を超えた患者数は、それぞれ 27 人（咀嚼機能）、8 人（MOF）、12 人（MTP）であった。それぞれの口腔機能において、咬合支持数は統計的に有意に影響していたが、上顎欠損の分布は影響しなかった。さらに重回帰分析により、MOF は咀嚼機能と強く関連していることが明らかになった（P = 0.042）。
結論：本研究では、患者数が少数であるためにその結果には制限があるものの、上顎切除患者の咀嚼機能の中央値は「口腔機能低下症」の基準値を上回ることができ、MOF は咀嚼機能に影響する因子である可能性が明らかとなった。